

2025 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	田中 夕子
研究テーマ	十世紀の在家者の信仰について－『九暦』と『日本往生極楽記』を中心に－
研究概要	本年度は、藤原師輔（908～960）の信仰・行業を主に考察する。師輔の日記『九暦』の仏事や諸資料に収められた師輔の願文等から、師輔の信仰を総合的に検討する。加えて『日本往生極楽記』の在家者の信仰と行業を考察し、『九暦』と『日本往生極楽記』の信仰と行業を比較、検討し、十世紀の在家者の信仰を多面的に解明する。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>藤原師輔の信仰を、彼の日記である『九暦』、子孫に残した遺訓『九条殿遺誡』、師輔室の法事のために作成させた「願文」等から総合的に考察した。</p> <p>師輔は日常的に仏教に帰依していた。特に『遺誡』の記事からは、本尊を定め、日々念誦につとめることをすすめ、日常的に行業を行おうとしていた。史料から明らかになった師輔の仏教信仰は、父忠平と同じく心身の平安を祈るために仏法の力を頼り、それを実現する僧の能力に頼るものだった。また、それを実現する手立てとして、密教修法を重視していた。これは師輔の孫の道長以降にも引き継がれていた。特に孫・憲平親王（後の冷泉天皇）の誕生、その後の立太子等の記事で攘災祈願の仏事を重ねて行っていた様子は、師輔の孫道長の『御堂関白記』の記事と類似している。そして、彼が関わった『遺誡』や室のための願文によると、来世のために仏事を欠かさないようにしていた。</p> <p>以上のことから師輔の信仰は、現世と来世を見据えた実践的なものであることがわかる。しかし、その具体的な内容は漠然としかつかめることができず、その点を明らかにすることが今後の課題となる。</p> <p>師輔は『遺誡』に、日記は自分や子孫が支障なく公務を行うための参考として書き残すようにと記している。『九暦』や『遺誡』の仏事記録は、師輔自身の信仰の表れであると同時に、子孫の持続的繁栄と精神的支えを意図した継承の手段であった。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>〔論文等〕</p> <p>単「藤原師輔の仏教信仰」『印度学仏教学研究』第 74 巻第 2 号、日本印度学仏教学会編（刊行日未定、査読有）</p> <p>〔発表〕</p> <p>単「藤原師輔の仏教信仰」第 76 回日本印度学仏教学会大会（2025 年 9 月 6 日、大阪大学）</p>
3. 今後の課題今後の課題	<p>平安時代、特に 10 世紀の在家者（貴族）の仏教信仰の実態を解明するため、『貞信公記』『吏部王記』等の日記史料に見える「仏像」の記事に着目し、貴族がどのような信仰や目的をもって、どのような仏像に祈ったのかを考察することによって、具体的な信仰実践の実態を明らかにしたいと考えている。</p>